

GATE SQUARE 小杉陣屋町 陣屋の精神を継ぐ、 類いまれなる 低層レジデンス

人気の武蔵小杉駅の先に広がる、由緒ある街・小杉陣屋町。
陣屋の精神を継承する、賃貸と分譲の2つの低層レジデンス
「GATE SQUARE 小杉陣屋町」にいま注目が集まる。

山澤健治・文 text by Kenji Yamazawa ナカサアンドパートナーズ・写真 photographs by Natsuta & Partners



およそ400年の歴史をもつ原家の旧屋敷跡地の再開発プロジェクトとしてスタートした「GATE SQUARE ARAE 小杉陣屋町」。プロジェクトに携わる者すべてが胸に刻んだのは、「精神の継承を」という言葉であったという。連続と続く時の流れを止めないように、古よりこの地に鎮座するお社や門、樺の木や石を活かしながら、街づくりのランドデザインに取り組んだのだ。そのためには目に見えるものだけでなく、土地の歴史やお社からの気の流れなどの目に見えないものも読み取り、設計に活かしたのだという。この地の歴史遺産を重んじ、自然と歴史の壮大なつながりの中で暮らす、新たな住環境の提案を目指したのだ。

蓄積された伝統の価値を、未来につなぐ建築デザイン

近年、急激に人気を高める武蔵小杉に誕生した「GATE SQUARE 小杉陣屋町」は、緑豊かな約900㎡の中庭「KAHALAガーデン」を敷地中央に、賃貸棟「THE KAHALA 小杉陣屋町」と分譲棟「THE RESIDENCE 小杉陣屋町」という、2つのライフスタイルを叶える上質で閑雅な低層レジデンスが囲むように建つ、希少性の高い注目物件。

しかし、最大の魅力は、明治を代表する近代和風建築であり、川崎市の重要歴史記念物にも指定された原家屋敷跡地に建つという誇りを胸に、中原街道沿いの門やお社など、この地に残る歴史遺産をそのまま現代の景色に溶け込ませながら、同時に外観デザインや素材、ラウンジなどの共用部や専有部の空間づくりに、近代和風建築の上質



石の彫刻やさざ波がモチーフのガラスアートなども鎮座する。自然豊かな憩いの中庭「KAHALAガーデン」から分譲レジデンスを眺める。



左上より時計まわりに、ガラスアートが優美に広がる「KAHALAガーデン」、KAHALAガーデンを望む分譲棟パーティスペース、高級感あふれる分譲棟ラウンジ、優雅な佇まいの賃貸棟ラウンジ、建物内路地の既存石モニュメント、趣ある「JINYA小路」、和の美を放つ灯笼と北門、既存樹を再利用したオブジェが鎮座する賃貸棟ラウンジ。



賃貸レジデンスの夜景。浮遊感あふれるフライング廊下を眺め、夜のKAHALAガーデンを眺めれば、ゆったりとした心地よい時間が訪れる。



なエッセンスを盛り込んだ点にある。もちろん、レジデンスそのものには、現代の建築技術の粋が詰め込まれているのだが、外壁などの建築デザインは、原家の旧屋敷がデザインモチーフ。重厚な蔵の意匠や大きな瓦屋根、黒漆喰の壁。そうした旧家のイメージを踏襲し、外装には職人の手で焼き上げたクレイマイスターといふし風合いのタイルを用いつつ、実際に蔵で使われた石も再利用することで、往時の面影をいまに蘇らせている。近代和風建築の伸びやかな庇を建物全体のプロポーションに活かし、バルコニーなどの形状に軒裏の樺の木風合いを踏襲し、デザイン化した。蓄積された伝統という価値を未来につなげる、建築デザインの好例と言えるだろう。

このようなデザインコンセプトは、賃貸、分譲を問わず、敷地全体で共有され、和の美を放つ行燈や灯笼なども随所に置かれている。門やお社のほかドッグパークやギャラリーなど生活に彩りを与える施設で構築された「陣屋門プラザ」も同様。そうすることで一体感のある街の景観を生み出している。中庭に置かれたガラスアートや石の彫刻のほか、トップデザイナーやアーティストの作品が多数空間を飾るのも、さらなる魅力を生む要因となっている。賃貸棟、分譲棟ですべてが同等のグレード感をもつて共有されているのはさすがである。

高級や上質といった従来の概念を凌駕する、新たな幸せのクオリティの提案。小杉の過去、現在、未来をつなぐ「GATE SQUARE 小杉陣屋町」の、資産ではなく史産としての魅力を五感で感じたい。



原家跡地を舞台に、土地の歴史をつなぐ暮らしを。

武蔵小杉と聞いて、どんなイメージが湧くだろうか。渋谷や東京、横浜を短時間でつなぐ交通の要所として、近年高い人気を誇るこのエリアは、2015年度「住みたい街ランキング」で前年の9位から5位に順位を上げた注目の街だ。2010年のJR横須賀線「武蔵小杉駅」開業にともなう、都心部へのさらなるアクセスの向上が「住む街」としての人気に拍車をかけ、駅周辺を中心に再開発が進行。ショッピングセンターやモールなど、いまでは世代を問わず楽しむことのできる商業施設がひしめき合うように立っている。華やいた街の印象は今後もその度合いを増すことは必至だろう。

しかし、タワーマンションが立ち並ぶ駅前の賑やかな再開発地域から一歩足を延ばすと、のびやかでゆったりとした時間の流れる、閑静な住宅地が現れるのもこの地の魅力である。その最たる例が、小杉陣屋町なのだ。

**由緒ある街にふさわしい、
想いをかたちにした住宅。**

川崎市中原区小杉陣屋町のアドレスをもつこの地は、まさに歴史と伝統を受け継ぐ場所。かつて徳川家康が江戸入城の際に利用した中原街道の要所にあり、宿場町として栄える一方、御殿が設けられて家康が鷹狩りを楽しみ、用水路開削のために陣屋が設けられるなど、由緒正しき土地としての歴史を刻んできた場所である。現在のよう



13路線が乗り入れる交通の要所として再開発が進み、高層ビルも立ち並ぶ武蔵小杉駅周辺だが、雄大な多摩川の自然はいまなお残されている。

小杉陣屋町の歩みと重なる、原家の歴史。

中原街道沿いで往時を偲ばせる、川崎市中原区小杉陣屋町。初代当主・文次郎の興した穀商に始まり、江戸時代から現在に至るまで、小杉陣屋町の地を見つめて続けてきた原家の歩みは、地域の歴史そのものであった。「人の土地を踏まずに川崎大師まで行

けた」という話が残されているほど、広大な土地を有していた原家だが、小杉陣屋町は別格。地域に根ざした商売や不動産事業、県議会議員も務め、地域社会の発展に寄与し続けた原家の旧屋敷跡地に建つのが、「GATE SQUARE 小杉陣屋町」だ。



上：江戸時代から脈々と続く原家の屋号「石橋」のイの字をあしらった鬼瓦。400年もの歴史を刻む意匠だ。
右：明治初期の原家旧母屋。

武蔵小杉駅周辺が整備される以前は、この中原街道の小杉十字路を中心に経済・文化が栄え、ロンドン・パリのように賑わったという。自然豊かな多摩川や等々力緑地にもほど近く、武蔵小杉の交通アクセスと生活利便性も享受するこの地は、陣屋を基盤とした清楚な地域コミュニティがあり、街に愛着をもつ人がいまでも多く暮らすエリアでもあるのだ。

江戸のフロンティアスピリットを体現するように、その街の発展に江戸時代より寄与し、およそ400年もの間、誰の手にも渡ることのなかった名家・原家の約2000坪もある旧屋敷跡地に誕生したのが、「GATE SQUARE 小杉陣屋町」である。

原家は、1784(天明4)年に肥料を売る店を開店後、米問屋、味噌屋、醤油屋、油問屋などを次々と手がけ、人々の暮らしを支え続けた名家。その後も銀行業や政界に進出し、いままも地域の発展に多大な貢献を続けている。当時のままの豪壮な姿を残し、いまや地域のシンボルともなった門やお社、さらにはドックパークやギャラリーなど、「GATE SQUARE 小杉陣屋町」敷地内には、居住者だけでなく地域に開かれたコミュニティスペース「陣屋門プラザ」が設けられているのも、原家の歴史を知れば納得である。永住するにふさわしい街に誕生した、由緒正しき低層レジデンスに、ぜひとも心震わせてほしい。